

ごんげんやまこふんぐん 権現山古墳群

○ 造られた時期

今からおよそ1700年以上前の紀元後3世紀後半に造られました。

邪馬台国の卑弥呼の時代より約50年後、行田市の埼玉古墳群より約200年前の時代にあたります。

古墳時代のなかでも最初期に造られていて、同じ時期の古墳はすでに壊滅しているものが多く、現存しているのは非常に少なくなっています。

○ 古墳群の特徴

全長32mの前方後方墳1基と方墳11基が確認されています。このうち県指定には保存状態が比較的良好な6基の古墳が指定されています。

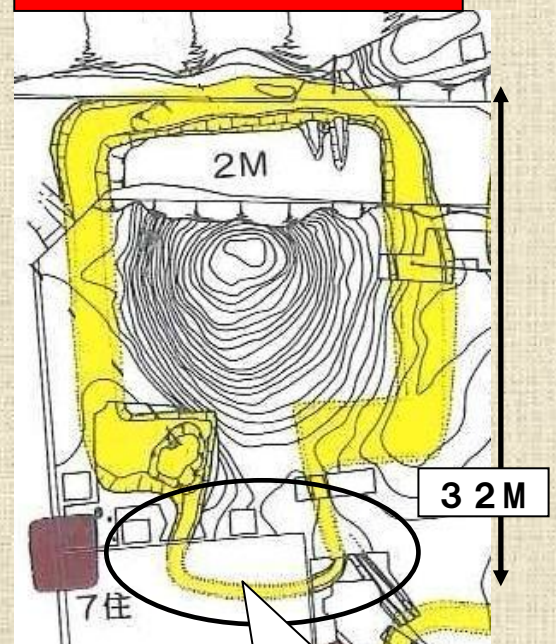
それぞれのお墓の周りには溝を掘って盛り土をしたところに死者を埋葬しました。これらのお墓は、このあたり一帯を治める首長の墓と考えられます。

前方後方形をした2号墳は、前方部の墳丘が未発達で扇状に開く形で、撥形（三味線などの楽器に使用する撥に似ていることから）と呼ばれる形をしています。また後の古墳のように葺石や埴輪の代わりに、土をこねて焼いて作った壺（底部を打ち欠いたもの）や高坏などを飾って、葬送儀礼をしたと考えられています。

○ 古墳群の範囲

古墳群は前方後方墳を中心として、周りに方墳が群がるように造られています。これまで、12基の古墳が確認されていますが、そのうち10基が所

2号墳：前方後方墳平面図



撥形（扇状）に
広がっている



古式古墳なので埴輪ではなく
土器で飾られている。



土器は底に孔が開けられている。

在した9,643㎡が埼玉県指定史跡として指定されています。

○ 権現山古墳群の重要性

① 古墳文化の波及を示す

奈良盆地を中心とする古墳文化が荒川下流域にも波及してきた最初期の古墳として位置付けられます。

② 墳丘が現存する

古い時期の古墳は、墳丘に盛り土しただけの高さの低い古墳であるため、後の時代の開墾等で盛り土が削られて壊滅してしまうものが多いなかで、墳丘が現存している希少な古墳群です。

③ 立地条件がよく残っている

古い時期の古墳は、その多くが水上交通の要衝となる高台に造られています。権現山古墳群も新河岸川沿いの高台のへりに造られていて、平地のほうから、あるいは川からよく見える場所にあり、その立地がそのまま残されています。

④ 歴史の変遷過程を知る好例であること

古墳群と同じ場所に古墳ができる直前まで使われていたたてあなじゅうきよあと竪穴住居跡が見つかっています。このことは、はじめ古墳のあった場所に集落を営んでいた人々が、古墳を造るときに見晴らしの良い自らの住みかを古墳を造る場所にして、自分たちは一段下の滝の集落に移動したということを示しています。そのような歴史の動きがわかる資料になっています。

⑤ 在来種の植生がよく残されている緑地であること

ふじみ野市内の東部では唯一残された貴重な平地林です。権現山緑地は、長年にわたり人の手により間伐、整備されながら保たれてきた雑木林であり、クヌゴ、コナラ、シデ、クリ、エゴなど生育する良好な落葉樹林を形成しています。平成20年3月に「遺跡等と一体となって当該地域において伝統的文化的意義を有する」ことから特別緑地保全地区に決定されました。今後も雑木林として維持してまいります。

平成21年3月に植林していただいた部分も幼木として成長しております。今後も見守っていただければ幸いです。